

2022. 1. 30. 主日礼拝説教  
聖書：マルコによる福音書6章45～52節  
『恐れと安心』

本日の記事は「イエスの湖上歩行」と呼ばれる箇所です。これはマルコだけではなく、マタイによる福音書も、そしてヨハネによる福音書も、おしなべて「給食物語」の直後に置かれています。つまり、マルコ以前のQ(キュー)と呼ばれる資料の段階から、時間的には両方とも「夕方」であったという矛盾を超えて、この二つの記事はワンセットの奇跡物語であったろうと推測されます。

マルコは「給食物語」を、初代教会に伝わるQ資料の生き生きとしたイエスと人々との関係の物語の良さを損なうことなく、そこにただ腹が一杯になるだけの単純な物語を、共に生きる側へと引っ張り上げる関係性のより豊かな物語へと編集し直しています。

同じように、本日の「湖上歩行」も福音のベースとしての関係性の豊かさを強調して編集してゆきます。

実は、マルコ6章全体というのは、初代教会への「教育的」内容なのです。まず、1～6aは問題提起として福音、つまり「貧しく・小さい者」を受け入れるか否かという問いです。これはナザレの人々—一般社会—によって拒否されました。それを受けて、6b～12は、弟子たち—初代教会—を、福音を否定する社会の中に派遣されます。

14～29に関係のない記事を挟んで時間的経緯を強調した上で、30～44の「給食物語」で弟子たちに福音に生きる主体性を問いかけます。つまり、福音とは教会の中にあるのではなく、拒否の渦巻く社会の中にあるということの確認です。

そして、本日の45～52で、当時の初代教会を取り巻く状況に即して対応が述べられてゆきます。53以下は、その大団円として福音が社会で受け入れられ始めたことが記されてゆくのです。

ユダヤ教も含めて他の宗教性は自分の民族だけの繁栄を約束したのに対し、イエスの福音とは特異な性格を持っていました。それは神が、社会や人々

との関係から捨てられた者の中にこそ顕現されるという教えだったのです。このことはユダヤ人キリスト者にとっては大きな「恐れ」でした。なぜならば、自分たちこそ大国の抑圧に今も打ちひしがれているがゆえに真っ先に救われるという自負を持っていたからです。

その初代教会のユダヤ人キリスト者に対する教育として今日の物語は描かれます。48節で朝まで逆風に漕ぎ悩む弟子の姿がその様子を語ります。マルコにとって彼らの「恐れ」とは「イエス不在」に尽きます。「イエス不在」とは自らの救済を望むあまり、福音をねじ曲げて占有化してしまうということでした。福音を異邦人どころか「貧しく・小さい・捨てられた者のために」ということがどうにも我慢ならなかったということでしょう。そして、その福音をありのまま受け入れるために、一晩中逆風に漕ぎ悩むという苦しみがあったのかと思われます…。

その弟子たちに対して、イエスは湖上を歩いて近寄られます。弟子たちは幽霊だと怖じ感えます。

イエスと出会う、つまり福音の質を知るとき、人は躓きを覚えます。それも徹底した躓きなのです。これが彼らが恐れた幽霊なのでしょう。しかし、イエスは「安心しなさい。わたしだ。恐れることはない。」と舟に乗り込まれます。ここにイエスの側からの迫り、自己本位な生き方から他者に仕える生き方への転換が求められてゆくのです。ここに「安心」があるのです。